
先生、スカートをもっと ように指導してください

御園生 久秀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

先生、スカートをもっと ように指導してください

【Nコード】

N7992R

【作者名】

御園生 久秀

【あらすじ】

生徒指導の坂本がとある生徒にスカートの長くして欲しいと言われた。その理由は……

(前書き)

違う友達の会話を混ぜてみた話です。暇つぶしにどうぞ。

放課後、生徒指導の坂本は一人、職員室で来週に始まる制服指導についての報告書をパソコンに打ち込んでいた。月初めにはいつもこの文章を打っているが別段と変わらず、前回の違反者数と違反に該当した項目を打つ程度だ。一時間もあれば終わってしまう。だが、今回は違った。前回は予想以上に違反者が多かった。

夏休み明けのせいで多分生徒たちが気が緩んでいたのだろう。それに加えて坂本がいつもより厳しく取り締まったのが原因だ。違反者の多さに校長は違反者を減らすために報告書の他に計画書を出すように言われてしまい、坂本はしぶしぶ作っていた。

仕事の面倒くささに坂本は少し窓の外を見る。そこには野球部がノックを受けている姿だった。相変わらず、守備がうまい。エラーしたら笑おうと思ったが難なくこなす姿にある意味、芸術を感じた。はたから見れば自分も出来そうに見えるくらいスムーズにボールをキャッチしていた。

しばらく見ていた。坂本だがすぐに飽き、計画書を書いて早く帰ろうとパソコンの打ち込みを再開すると職員室のドアから元気な声が飛び出してきた。

「失礼します。図書室のカギを返しに来ました」

「ああ、上条かお疲れ。いつも通りのところにカギを置いてくれ」

「分かりました」

上条はそう言ってドア近くにある鍵掛けに図書室のカギを掛けると暇なのだろうか坂本の所に行き、パソコンを覗き込んだ。

「先生、何やっているんですか？」

「来週の制服指導について計画書だ」

「計画書ですか？」

「前回、夏休み明けのせいか生徒の服装が乱れたいたから、それを

直すために計画書を書いているところなんだ。特に女子のスカートが短くなっていたのは酷かったのを覚えている。今回は特にきびしく取り締まるつもりだ」

「そうですね。ぜひやるべきです」

「男のくせに珍しいな？ スカートの中身が見えなくなるから止めてくれ』というのが中高生だろ。俺もそうだったし」

「だって先生……女の太い脚は見たくないです」

「うん。上条、少し先生とお話ししようか」

吐き捨てるように言う上条に坂本は乾いた笑いする。

「先生、一つ聞きます。女の足は白くてスラーとした細い脚。しなやかで毛のないつるつるした脚は頬ですりすりしたくなるじゃないですか、滑りの悪く、ごつごつした太い脚にどこに魅力があるんですか？」

「……いいか上条。人には好みがあるのだから太い脚も好きな奴もいるぞ」

「先生は好きなんですか太い脚が」

「肉付きが良い脚は先生は好きだぞ。脚枕なんて最高だろ」

「うわ自分も変態だと思つてたけど先生も充分変態だ」

「男は変態だろ。女のタイプもしかり自分の好きな物に対して情熱的になるだろう」

「ああ、運動部は上手くなるうとDMのように頑張りますよね」

「いや、そういう意味じゃなくてだな……」

「坂本先生、計画書は出来ているかな？」

二人の会話をしている中、校長が計画書を見に職員室に訪れた。

二人は校長の存在に気付き、挨拶すると校長はつかづかと坂本の所に近寄り、パソコンの画面にある計画書を見る。

「ふむ、大方出来ているようだね。引き続き頼むよ」

「はい、分かりました」

特に何も言われずに済んだと坂本は安堵した。何か言われると面倒くさい。校長は満足そうに上条の顔を見る。

「ふむ、君は確かこの前も坂本先生と一緒にいたね。名前は……」
「上条です」

「そうか上条君と言うだね。ちなみにどんなことを話していたんだね」

「女の脚の良さについて語っていました」

上条は臆面なく話す。その姿に坂本はため息をついた。

「そうか坂本先生もそういう話しをするんだね。真面目そうだからそういう話しが嫌いだと思っていたよ」

坂本は手を振って否定するが、校長はそんなことを気にしなかった。

「坂本先生はどんな脚が好みなのかね？」

「いやないですから」

「そんなことあるわけがなからう。男なら色々あるだろう答えてみなさい」

「では校長先生は脚について色々あるんですか？」

「あるに決まっていますじゃないですか坂本先生。脚にも色々あって魅力が一つ一つ違います。スラーとした真っ白な生脚は荒らされていない雪原のような美しい。あれは毎日眺めたい。しかし、肉付き良い脚……特にふとももは最高だよ。スカートから見えるちらと出るふとももはまさに第2の絶対領域。ふとももを見るだけでむらむらしてしまう。そのおかげで仕事が手がかかず、懲戒免職をくらってしまいます。なので坂本先生に計画書を頼んだよ。しかし厳しくしすぎないでくれよ」

その言葉に坂本はにっこりと笑い。

「分かりました。昔流行ったスケバン位、長いスカートに規定しますね」

「いやさすがにそれは行き過ぎだ。せめて覗くと見えるか見えないかくらいの範囲を……」

「ひざ下10cmあれば充分ですね。それでは校長お仕事頑張ってください。上条、校長先生を校長室に……後でラーメンでもおごる」

「校長先生。どうぞ」

上条は坂本に従い、校長を職員室から追い出そうとする。

「坂本先生、そんな事しては生徒たちの夢を奪ってしまう。パンチは男の夢です。モロよりチラの方が断然良いに決まっているじゃないですか。それを奪うのは生徒の事を全く考えていません。そんなことしたら生徒との信頼関係をなくします。すぐに止めなさい」

「上条は早くしてくれ」

校長の抵抗はむなしく上条と一緒に職員室を出ていた。気だるそうに坂本はパソコンを開き、スカートの長さに規定の所にカーソルを近づける。

「確かに男はモロよりチラが好きだよな……少しゆるくするか」

坂本はパソコンの数字を打ち直した。

(後書き)

話しのつながりが失敗した！！
そして短い話のストックが尽きた
(笑) とりあえず書きまますか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7992r/>

先生、スカートをもっと ように指導してください

2011年3月21日14時55分発行